「田園環境都市」とは

2022年6月24日、6月26日

小山市長　浅　野　正　富

はじめに

- 私が市長選の公約の一つとして掲げ、市長就任後は市政の運営方針の一つとしているのが、「田園環境都市 小山」のまちづくりです。そして、一昨年以来渡良瀬遊水地ではコウノトリが３年連続繁殖していますが、野外でコウノトリが繁殖しているのは東日本では渡良瀬遊水地しかありません。
- 渡良瀬遊水地の一角を占めコウノトリが営巣する人工巣塔がある小山市は、正にコウノトリに選ばれた「田園環境都市　小山」と言えるでしょう。
- 何故私が田園環境都市のまちづくりを発想するようになったのか、そして具体的にどのようなことを構想しているのか。その一部でもご理解いただければ幸いです。

「田園環境都市」を考えるきっかけになった弁護士会での里山保全の調査・提言活動

- 私が弁護士会の環境保全に関わる委員会活動で里山保全の調査研究に携わるようになった１９９０年代前半、里山という言葉はまだ使われはじめたばかりでした。また、当時の里山保全は、燃料革命によって薪炭等としては利用されなくなり開発のターゲットとなったクヌギやコナラ等の雑木林の保全管理の問題として捉えられていました。
- しかし、その後、薪炭林として利用されてきた雑木林は農用林として谷津田等の農地をはじめとする農村環境と一体となって存在していることの認識が深まり、里山保全は、単なる森林管理から、耕作放棄され雑草まみれとなってしまった谷津田の復田や、用水路等の管理も含めた農村環境の再生・保全の問題として捉えられるようになりました。

里山の消滅と都市計画

- １９９３年から里山保全の問題に足掛け１０年以上関わる中で、首都圏にかつて広く存在していた農村環境が都市のスプロール化によって市街地に変わり里山が減少消滅してきた過程に、都市計画がどのように関わってきたのかということに興味を持ちました。
- ロンドンでは都心から車で３０分も行かないうちにグリーンベルトの田園環境が広がります。産業革命による大気汚染が進行して兵隊となる若者の体格が劣化することに危機感をもったヨーロッパ諸国は、公園は都市の肺であるとして都市における緑地保全に意を尽くしてきました。都市にとってその内部や周囲に緑地の存在が不可欠なことは、ヨーロッパでもアメリカでも当然のこととされています。

グリーンベルトを構想した東京緑地計画の放棄とスプロール化

- 東京の場合は、都心から１時間電車に乗っても家並が続き、まとまった緑がほとんど見えなくなってしまっているのが現状です。東京にはまともな都市計画がなかったために、こんなに緑が少ない大都市になってしまったのかと思えます。ところが、戦前には東京にも東京緑地計画というグリーンベルトで都心を取り巻く計画がありました。
- 戦前の専門家は、都市と緑地の関係の重要性を正確に理解して都市計画を作っていたのです。しかし、戦後の経済成長一直線に染まった日本は、最終的に東京緑地計画を放棄して東京一局集中に邁進し、今では東京を都市的集積地域人口３８０５万人の世界一のメガシティに押し上げました。

世界に誇る「庭園都市/江戸」

- 江戸時代の江戸のまちは人口１００万人を超える世界一の都市でしたが、江戸の町は「田園都市」「庭園都市」と呼べるほどに花と緑にあふれていたと言われています。
- １８５８年に江戸に入ったイギリス公使のオールコックは、その印象を「（江戸は）冬でも景色が美しく、広い谷間のふところに抱かれている。ゆるやかな坂が多く、緑の森に囲まれている・・・」と書き残していますし、イギリスの植物学者ロバート・フォーチュンは江戸の町をみて、「樹木で縁取られた静かな道や常緑樹の生垣などの美しさは、世界のどの都市も及ばないだろう」と賞賛しています。

「庭園都市/江戸」から「メガシティ/東京」へ

- 同じ世界一とは言え、里山の存在を消し続けてメガシティとなった東京は庭園都市と呼ばれた江戸とは全く違うまちに変貌してしまったと言えるでしょう。そして、都市に住む人々の田園環境に対する意識もまた大きく変わってしまっているのではないでしょうか。
- そもそも戦後の日本は、国際競争力の弱い農林業について一貫して税金を投じて保護しなければ存続できない厄介な産業と見做し、自由貿易を進め工業製品の輸出を拡大するために代わりに農産物の輸入を拡大していく政策を推し進めてきました。食糧自給率が４０％を割ってしまうことが世界の常識の中ではどれだけ異常なことかを意に介することもなく、真剣に農業振興に取り組んで来たとは到底言えない状況を続けてきたのです。

イギリスの田園空間形成に影響を与えた日本の農村の美しさ

- 里山保全にとって参考になると考えイギリスの素晴らしい田園環境を代表するコッツウォルズ地方を訪ねた時には、人々の普段のくらしが営まれている田舎の村が何でこんなに魅力的なのだろうとイギリスという国が持つ田園環境に根差す文化と伝統の力の大きさを感じました。
- イギリスの田園空間が美しいことについて、一部の識者からは日本の農村を見習った結果だとも指摘されています。明治時代に日本に視察にきたイギリス人たちが日本の農村の美しさに驚き、帰国して田園整備に力を入れた結果、イギリスの現在の素晴らしい田園空間が形成されたというのです。それほどまでにかつての日本の農村は美しかったのでしょうか。
- 私が昭和４４年に東京の団地から区画整理がされる前の乙女上町に引っ越してきたころには、確かに日本の農村の美しさの名残りがそこら中に存在していました。今の市街地には見られない自然の豊かさがあり、自宅の周りは平地林に囲まれ様々な生きものが生息していましたし、家の裏にあった河岸段丘のがけには清水が湧き、沢ガニが生息していました。

欧米の田園環境保全を基礎とする都市計画

- イギリスでは、ハワードが「田園都市論」で提唱した、田園環境の中で人口規模３万２０００人程度の都市がクラスター上に存在する都市群の建設がレッチワースで実現し、東京の田園調布のモデルとなりました。ナポレオン３世の命を受けパリ大改造を成し遂げたオスマンは日比谷公園の４７倍の広さがあるブローニュの森を整備しました。アメリカではパークシステムによって、都市でありながら都市でない、田園でありながら田園でない郊外が創造されました。
- 都市環境と田園環境を調和させたまちづくりの取組みは欧米では１９世紀から１００年以上の歴史があります。

里山を保全するための都市計画

- 里山を保全していくには、改めて都市環境と田園環境の調和がとれたまちづくりのできる都市計画が必要とされます。
- また、里山が維持されてきた循環型の社会経済システムは江戸のまちを２５０年以上も田園都市や庭園都市たらしめてきたシステムですし、産業革命の究極に現れた大量生産、大量消費、大量廃棄のシステムが限界に直面したことにより１９７０年代から始まった持続可能な開発の取組みにとっても循環型の社会経済システムへの転換は必須とされています。

里山保全から広がった関係領域への関心

- 里山を保全することに始まった調査研究は、都市環境と田園環境を調和していくためのまちづくり、循環型の社会経済システムへの転換を前提とする持続可能な社会の構築の問題に繋がり、循環性に根差した有機栽培に取り組む農業の重要性や社会経済システムのパラダイム転換を迫る環境教育の必要性を再認識しました。同時に、共同資源管理としてのコモンズと所有権概念の再構成の問題にも取組み、２００４年の弁護士会でのシンポジウムで、それまでの調査研究の成果を発表して、シンポでの報告書を「里山保全の法制度・政策－循環型の社会システムをめざして－」のタイトルで書籍化し、里山保全に関しては一区切り付けることができました。

里山保全から湿地保全の活動へ

- 私の田園環境都市のまちづくりの発想の出発点は弁護士会での里山保全の調査研究にありますが、並行して湿地保全の調査・研究にも携わるようになり、その後市民活動に転じて渡良瀬遊水地はじめ全国の湿地保全に関わる市民活動に関わってきました。湿地保全の条約であるラムサール条約の掲げるワイズユースの理念が持続可能性の概念と分かちがたく結びついており、湿地保全活動も里山保全と同様に持続可能な社会構築の取組みの一つとの意識をもって活動してきました。
- 里山保全も湿地保全も生物多様性の維持・向上に貢献するという大きな意義を持っていますが、生きものたちと共生できずして持続可能な世界が実現する筈がありません。ラムサール条約湿地登録後に渡良瀬遊水地で行ってきた生態系の頂点に位置するコウノトリの定着・繁殖のための活動は、生きものと共生する持続可能な社会構築の取り組みそのものと言えます。
- 何故なら、コウノトリが生息、繁殖するためには、微生物を底辺、コウノトリを頂点とする生態系ピラミッドの食物連鎖を構成する様々な生きものが生息できるだけの自然環境が維持されていなければならないからです。

持続可能性と定常型社会

- 里山保全、湿地保全と持続可能な社会構築を目指す取組みは、かつての江戸やヨーロッパの中世のように人口が一定に維持される定常型の社会と多くの共通性を有しています。
- 定常型社会研究の第一人者である京都大学こころの未来研究センター教授の広井良典氏によれば、定常型社会とは右肩上がりの成長、特に経済成長を絶対的な目標としなくとも十分な豊かさが実現されていく社会とされ、市場経済的な需要は量的には飽和し，むしろそれを超えた，コミュニティや自然やケアや公共性等々に関わる，人間のより高次のニーズや欲求が重要になり、働き方や生活の各方面にわたる「豊かさ」が再定義されていく社会とされています。

ＳＤＧｓが目指すもの

- ２０１５年の国連総会で採択された持続可能な開発目標とされるＳＤＧｓの１７の目標は、環境、経済、社会に関する多岐の項目にわたる目標になっています。持続可能な開発とは、将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発とされており、それを実現していくために様々な事柄が関連していく中で、ＳＤＧｓでは環境、経済、社会の３分野が統合するよう１７の目標を掲げているのです。
- そして、１７の目標を実現することによって、最終的には地球という限られた環境の中で生かされている私たちがその環境容量の中で生活し経済活動を続け、そして一人一人が自己実現できる「誰一人取り残さない」社会（あらゆる人たちが活躍できる多様性と包摂性のある社会）の実現を目指していることを忘れてはなりません。

ＳＤＧｓ①～⑥

1. 貧困をなくそう

あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ

2. 飢餓をゼロに

飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する

3. すべての人に健康と福祉を

あらゆる年齢のすべての人の健康的な生活を確保し、福祉を推進する

4. 質の高い教育をみんなに

すべての人に包摂的(※)かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

5. ジェンダー平等を実現しよう

ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る

6. 安全な水とトイレを世界中に

すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する

ＳＤＧｓ⑦～⑫

7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに

すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する

10. 人や国の不平等をなくそう

国内および国家間の格差を是正する

8. 働きがいも経済成長も

すべての人のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を推進する

11. 住み続けられるまちづくりを

都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靭かつ持続可能にする

9. 産業と技術革新の基盤をつくろう

強靭なインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る

12. つくる責任 つかう責任

持続可能な消費と生産のパターンを確保する

ＳＤＧｓ⑬～⑰

13. 気候変動に具体的な対策を

気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る

14. 海の豊かさを守ろう

海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する

15. 陸の豊かさも守ろう

陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る

16. 平和と公正をすべての人に

持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する

17. パートナーシップで目標を達成しよう

持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

持続可能な「田園環境都市 小山」を目指すまちづくり

- 小山市は、農業、商工業のバランスが良く、東西南北の交通の要衝にあり、市街地の周辺に農地や平地林の田園環境が広がって思川が注ぎコウノトリが定着・繁殖したラムサール条約湿地／渡良瀬遊水地に繋がるすばらしい環境を有する首都圏の中で有数の田園環境都市です。
- ユネスコ無形文化遺産に登録されている本場結城紬は、桑の葉を食べて育つ蚕の繭から作られた真綿を紡ぐことにより生産される糸を原料とするオーガニックな伝統技術で田園環境都市に相応しい遺産です。また、国の重要無形民俗文化財に指定された「間々田のジャガマイタ」も五穀豊穣や疫病退散を祈る農村の伝統民俗文化で田園環境都市の重要な構成要素です。
- このような先人たちの連綿と続けられてきた営みによって形成された田園環境都市としての魅力あふれる小山を将来世代に確実に繋ぎ持続可能なまちにしていくことが「田園環境都市 小山」のまちづくりです。

ＳＤＧｓの実践と一体化したまちづくり

- 全世界でＳＤＧｓの１７の目標を達成することにより持続可能な社会の構築が目指されるなかで、小山市のまちづくりにおいても当然ＳＤＧｓの取組みが求められます。
- ＳＤＧｓを実践することによりどのようなまちが目指されるのでしょうか。自然生態系の頂点に立つ野生のコウノトリと共生して人々が生き生きと暮らす田園環境都市は、ＳＤＧｓによって実現される持続可能なまちのモデルの一つということができます。
- 「田園環境都市 小山」のまちづくりとは、この素晴らしい環境を将来にわたって維持向上させ市民一人一人が真の豊かさを実感し自己実現を目指すことのできる、ＳＤＧｓの実践と一体化して行うまちづくりです。そのためには、市街地整備や農地・緑地の保全を別々の事業として行うのではなく、都市環境と田園環境を一体のものとして捉えて環境管理を行うだけでなく、ＳＤＧｓの17の目標をはじめあらゆる政策を体系化し統合して行うまちづくりなのです。

「田園環境都市 小山」で実感する真の豊かさ

- 「田園環境都市 小山」のまちづくりによって市民が実感する真の豊かさとは、私たちの毎日の暮らしの中で本当に「大切なもの」を見つけ出し（⇒「小さな自慢が山ほどあります」）、それを守りながら生き生きと暮らし、確実に未来につなげていくことの中にあるのではないでしょうか。
- 私たちにとって本当に「大切なもの」を見つけ出すために、私たちは日々暮らしている小山市の成り立ち、風土、自然、文化、伝統というものを改めて学び直し、そして、希薄になってしまった地域コミニュティを再構築していかなければなりません。
- そこに生活する人々が自分たちの営みを常に見つめ直し、生涯を通して学んで行こうとする姿勢こそが、「田園環境都市 小山」のまちづくりにとって最も必要とされているのです。